江戸幻想文学誌

百物語の法式化は,近世町人によって点ぜられた開化の火が，闇のなかの自然霊を克服してゆく儀式であった。しかし，その法式では一話ごとに蠟燭の火は一つずつ消されてゆく。すなわち，一つには禁忌の〈犯し〉の方法によって，近世人たちが自分たちの〈夜〉をとりもどす――〈闇〉はまた聖なる世界でもあった――儀式でもあった。

高田 衛

平凡社選書 106

高田 衛（たかだまもる）
1930年富山県生。早稲田大学卒。東京都立大学教授。主著『上田秋成年譜考説』(1964)，『餓鬼の思想—中世文学私論』(1969)，『シンポジウム日本文学10　秋成』(編著，1977)，中公新書『八犬伝の世界—伝奇ロマンの復権』(1980) など。

平凡社選書106

江戸幻想文学誌

1987年4月10日　初版第1刷発行

定　価　2000円
著　者　高田 衛
発行者　下中直也
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区三番町5番地
郵便番号　102　振替 東京 8-29639
電話　東京　(03)-265-0471〔編集〕
(03)-265-0455〔営業〕
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社石津製本所

©Mamoru Takada 1987 Printed in Japan
ISBN4-582-84106-6
乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）

江戸幻想文学誌

高田 衛

平凡社

目

次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

怪談の論理——文学史の側から……8
三月十八日の夢　闇の語り手たち　闇・夢・そして怪異文学の成立
禁忌と犯し——怪談の論理

◆◆

幻語の構造——雨と月への私注……22
宗貞の韜晦　二重な心性の中のことば
「わやく」の両義性と『雨月物語』の言語　幻語——その表層と深層
「恨みの秋」　連鎖の物語・水の秩序　キイワードとしての「雨」と「月」
雨月の夜の光と影　幻語の方法

奇談作者と夢語り——秋成・庭鐘・綾足たちの世界……46
夢みる老人　庭鐘の「紀の関守」の物語　夢託の思想
「愛」という主題の出現　夢語りの構図　夢現象とその表現
宣長の「夢」理解　綾足の「よみの巻」　深草という闇の空間

境界――夢語りの必然性として　冥婚の幻想　綾足、この夢想家の論理
喜多村金吾の恋
狂蕩の夢想者――上田秋成……121
余斎乞食　三余斎から天罰七十余斎へ　故郷喪失の論理
「狂蕩」――聖と俗のはざまにて

◆◆

亡命、そして蜂起へ向かう物語――『本朝水滸伝』を読む(I)……136
東宮出奔　反勧懲小説としての『本朝水滸伝』　古代中央政権と亡命者たち
連帯する異族王たち　大納言姫君の密通　過激なる虚構
山中他界の神々の蜂起
遊行、そしてまつろわぬ人々の物語――『本朝水滸伝』を読む(II)……166
作者と国家――綾足の父について　異説の中の津軽校尉　鼻彦軍談
闇の物語としての「正史」　〈倭建命〉モチーフの問題　浮び上る遊行の伝統

◆◆

怪異の江戸文学——世の中は地獄の上の花見かな（一茶）……188

江戸文学と「悪」　「地獄」と「花見」　一茶の〈人鬼〉認識

京伝の「美少年」と「女侠」　『桜姫全伝曙草紙』の世界

松平定信の「怪異」事件　怨念の構図とその現実的根拠　アニミズムの復権

京伝の骸骨モチーフ　化政期江戸文学の原質をめぐって

稗史と美少年——馬琴の童子神信仰……226

『近世説美少年録』のこと　馬琴の「美童」論

美少年——終末論的世界として　『封神演義』と『八犬伝』

あとがき……255

初出一覧……258

江戸幻想文学誌

怪談の論理——文学史の側から

◆三月十八日の夢

寛政十一年（一七九九）己未春三月十七日、馬琴は冥土へ行った夢を見た。いま流にいえば三月十八日あけがたのことである。ふしぎにその夢は目がさめてからもはっきり覚えていた。筆まめな彼はそれを克明にノートした。「夢に冥土」という題で、それが『烹雑の記』に載っている。「痴人、面前に夢を不レ説。われ又秘して、何にかはせん」と付言をつけて……。

物思へばながむる空も霞こめて、世は春ながらこもりゐつ。詞かたきもがなと思ふ折、亡友某甲、忽然と来にけり。予、あやしみて、子は曩に身まかり給ひぬと聞たるに、今訪るゝことこゝろ得がたし。いかなる故やあると問ば、友のいはく、その事に侍り。けふなん冥府放赦の日なれば、吾們たま〳〵遊行を許さる。いざ給へ、黄泉の光景を見せまゐらせんといふ。予、

遽しくこれと共にゆく程に、前程いくそばくそをしらず。又絶て東西を知らず。遂に忽地、友に後れて、ます〳〵こゝち惑ひにけり。山を踰、水を渉り、ゆき〳〵て見かへれば道次に官舎あり。門前に莚布わたしたる上座に、媼ひとりみつわぐみてをり。ちかくなる随にこれを見れば、荆婦が養母会田氏なり。（中略）海月の骨にあふこゝちして、別離の情を述るほどに、（中略）また外姑に対て、わが親胞兄弟は何処にをはする。あはし給ひてんやといへば、外姑、答て、この事、容易からずといへども、あはんと思はゞゆきてたづねよ。路なほ遙なりとて、叮嚀に指南せられしかば、やがて外姑に辞しわかれ、ひたと走ること、数十町にして、路いと陜く、忽地に暗くなりて、日のくれたるごとし。時に前面に物ありて、ゆるし玉へ、ゆるし給へと叫びしかば、胸まづうち騒ぎながら、その声を嚮導にしてゆきて、これを見れば、身長六尺あまりなるいとおどろ〳〵しき盲法師が、嚮に予を誘引来れる亡友をうつ俯に踏すえ、汝何の為に陽人を伴ひ来れる。今もしこれを忽にせば、必地府の制度を乱さん。とくいへ。いはずやと罵つゝ打懲すにぞありける。（中略）忽地、袂を引ものありけり。驚つゝ見かへれば、外姑なり。声をひくめて、よからず〳〵汝速に帰るべし。もし帰らずば、彼友ます〳〵笞をうけん。人を苦むるは善根にあらず。とく〳〵といそがしたり。われいまだ、親胞兄弟に環会奉らず。こゝよりむなしく帰らんは、遺憾きことといふべうもあらねど、何ともすべなくて、又外姑

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

に導かれ、旧来し路へかへると思へば夢さめにき。……

目がさめてみると、寝衣をとおすほどにびっしょりと汗をかいていたと馬琴は書いている。

そこに、俗説に説かれるようなおどろおどろしい地獄図があったわけではない。亡友を打擲するのは荒唐なる牛鬼・馬鬼どもではなく、「六尺あまりなる」盲法師であった。外姑は、とある屋敷の門前に莚をしいて糸くりをしていた。非日常というにはあまりに日常的な、そのくせ唐突な冥府の夢の光景ではあった。そして、それゆえにかえって、馬琴は、この夢にまがう方なき「冥府」を実感したようである。馬琴はこう書いている。「むかし、小野篁の生ながら冥府にゆきかひ給ひたる、笙窟の日蔵の燋熱地獄を見給ひたる。その事、妄誕に近しといへども、夢といいはゞ誣べからず。けふよりしてわれは信ず。白氏が三夢記、寓言にあらず。于時、己未ノ暮春十九日、家廟を拝して自記し訖」。時に馬琴、三十三歳。その名も夢を暗示する『月氷奇縁』(1)を書き下して、一流作家の地位を確立する日の、ちょうど五年前のことである。

住むところこそちがえ、この年六十六歳で京都に居た上田秋成が、歳も暮れがたになって、同じく死せる妻瑚璉尼の、黄泉からの手紙に接した夢をみた(「よもつ文」)のはおもしろい偶然である。同じ年にみた、それぞれの冥土の夢を比較すれば、二人の作家的資質のちがいは歴然たるものがあ

って興味ぶかいが、いまは触れないことにする。

◆闇の語り手たち

それよりも、たとえばこんな問題が考えられる。馬琴に答えて、亡友は「冥府放赦の日」といった。お盆ならいざ知らず、三月十八日に地獄の釜の蓋があくなどとは聞いたことがない。しかし、誰もがただの日付と思うだろうこの日を、柳田国男翁ならば、けっして偶然に帰することはしなかったにちがいない。

「三月十八日は決して普通の日の一日ではなかつた。例へば江戸に於いては推古女帝の三十六年に、三人の兄弟が宮戸川の沖から、一寸八分の観世音を網曳いた日であつた。だからまた三社様の祭の日であつた。といふよりも全国を通じて、これが観音の御縁日であつた」[2]。しかも、それだけではない。「三月十八日は簡単に観世音の御縁日と、片付けてしまふわけにも行かぬやうである。例へば伝説上の小野小町、和泉式部、さては歌の神と祀らるる人丸大明神なども、すべて此日を以て命日として居り、言はば我々の昔語りの日であつた」[3]。この文脈では「昔語り」とは、先祖に近づく話のことに他ならぬ。柳田氏はまだ幾つかをあげ、そして述べている。「暦で日を算へて十八日と定めたのは仏教としても、何かそれ以前に暮春の満月の後三日を、精霊の季節とする慣行はなかつたの

であらうか[4]」。

馬琴は特別な観音の信者ではなかったし、「精霊の季節」について右のような知識があったとも思われない。しかるに三月十八日の夢は、この日を「冥府放赦の日」とし、奇怪にも過去形でもって、近代の柳田説を裏づけてしまうのである。わたしはこれを、できればただの偶然とみたい。けれど、生涯にただ一度の馬琴の（夢の）冥府訪問が、盆の精霊会でもなく、ましてただの日でもなく、当時なかば忘却の中にあった、さまよえる精霊たちの復活の日、そして闇の語り手たちの目ざめる日、三月十八日以外のどの日でもなかったという事実は強烈にすぎる。そして馬琴の冥府訪問の第一の目的が、口碑、昔語りの語り手としての先祖の歴訪にあったこと[5]と、それはあまりにもみごとに符合する。

ちなみにいえば、翌十九日が馬琴の祖父興吉（おきよし）の命日であった。先祖（血筋）の物語への希求とは、いわば過去という時間の中にかくされた、未知なる物語世界への憧憬であろう。夢がその道をつくるのだが、その闇の中から、小町、和泉式部、人丸大明神らに象徴される晦冥幻暈の伝説世界という、彼のもう一つの血筋が脈搏ちはじめる――たとえば、六尺豊かな盲目の法師である。琵琶法師にかぎらず、彼らこそが、畏ろしくも聖なる「昔語り」の語り手たちであったことは周知であろう――ことを、いったいどう考えればいいのだろう。

「けふよりしてわれは信ず」という一語は、目ざめて後の、したたかに寝衣を濡らした冷たい汗を代償にして得られた一語である。何を信じたのか。いうまでもなく「闇」をである。けっして馬琴は夢と現実を錯雑したのではない。なまじの現実よりも、夢であることによっていっそう生き生きした、もう一つの物語世界があることを信じたのである。そして、日蔵上人を、小野篁を、『三夢記』等の異国の幻想を信じたとき、馬琴は、冥土他界を夢にみた人たち、日蔵、篁、菅原孝標女、慈心房尊恵、近世でいえば京都鷹が峰の米穀商溝口清助、後人でいえば異邦人小泉八雲らの系列の一人、語り手、すなわち幻想の祖述者となったのである。わたしは、いま、にわかに馬琴巫覡説をたてようというのではない。いいたいのは、上田秋成が加島稲荷の六十八寿神授説を信奉し、本居宣長が吉野水分（みくまり）神社の申し子たることを確信したように、前近代人滝沢解には、内なる豊饒としての「闇」があったということである。三月十八日の夢は、その「闇」のありかを示したのであった。それこそ近代の作家が見失っていったものであった。それを囲繞する「夜」を失っていった以上、あたりまえのことに過ぎないけれども……。

◆闇・夢・そして怪異文学の成立

「昼夜を以テ云へば、昼は此世、夜は黄泉なり」（『古事記伝』九之巻）といったのは、他ならぬ本居

宣長だが、三遊亭円朝が、その高座で最後まで瓦斯燈を拒否し、古風な燭台を守りつづけたのも、そのような夜—闇への固執といえばいえるのだ。

とすれば、三浦梅園の「物の怪の弁」が、じつは「夢の弁」であった（『梅園叢書』）ように、夜—闇の世界に通う「夢」が、新しく意識化されるのは必然でなければならぬ。

意外に気づかれていないことだが、「白峯」（『雨月物語』）の、あの崇徳院御霊の火を噴く怨念の激語が飛び交い、凄じい怨霊のイメージが明滅する山中の一夜は、西行の「さらに夢現をもわきがたい、新院悲運への痛恨の心の眩みにはじまり、文脈をたどれば、「あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに」（「眠るともなきに」とは眠ったことである）迎えた一夜に他ならず、「月は峰にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふが如」く、明けていった一夜であった。あえていえば、「白峯」とその原拠的作品『保元物語』や『四国遍礼霊場記』や謡曲『松山天狗』等とを、決定的にへだてるのは、その強烈な夢の世界への仮託であったのだ。

近代人がつい見おとしがちな、そんな夢への仮託は、『雨月物語』では、「浅茅が宿」にも「仏法僧」にも、もちろん「夢応の鯉魚」にも「貧福論」にも隠微にみられるところである。「夢のまさなきにはあらず」と左門が絶叫するとき（「菊花の約」）ですら、夢は踏まえられていた。

「夢は一つの第二の人生である」（『オーレリア』）という、ネルヴァルの有名なマニフェストが発せ

られたのは一八五三年のことであったが、わが国では一七六〇年代、『雨月物語』をはじめ、都賀庭鐘の翻案「奇談」、建部綾足の古文「奇談」などで、それに相応する、仮に「夢」の趣向とよぶが、そういう小説的技術はすでにみられたのである。庭鐘・綾足について、それぞれの「夢」の趣向を実証するのはたやすいことなのだ。

ただし、この場合の夢は、文学史のなかの古代・中世の夢とはまったく違っている。天才西鶴が、「生」の重味のこもった、どん底の現実とするどく対比して、その空無性をえぐりだしたように(6)（その聖性が否定され）、また宣長が「作り物語」の虚妄性に比して、その無常の寓意の観念性を暴露したように(7)（「夢」という語の比喩語的伝統が批判され）、この二人に代表される二つの「夢」の近世的否定の後に、はじめて、幻想・虚妄としての近世の「夢」は、いわば文学的な特権をかちとったのであった。怪談一般から文学へと昇華する過程を、そういう「夢」という肉体が媒介していたことは、もうすこし注目されていいと思う。

さらにいえば、それ以降とて、怪異文学（芸能も）の展開を媒介する「夢」の趣向は、けっして無視できるほど微弱なものではない。『桜姫全伝曙草紙』（京伝）の桜姫のドッペルゲンゲル、『三七全伝南柯夢』（馬琴）の樹木霊の因縁など、読本のなかの文字どおりの夢的趣向はさておいても、南北怪談狂言でいえば、代表作『東海道四谷怪談』を論ずるのに、五幕目の夢の場を除外するわけには

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo